

かった。八号トレンチでは、石積基礎に一本胴木丸太とその止杭が、粘土に巻かれた中から検出され、その切口は真新しい状態を保っていた。然し何時頃のものか、確定する資料は得られなかった。

以上のように、護岸予定区域には、一〇号堀では構築時期不明の遺構があり、一号堀では、原初のもので推測される遺構と、構築時期、性格不明の遺構があり、一部には遺物包含層のあることが判明した。依ってこの遺構の全貌を解明せずに、掘削施工することは、不相当と認め、全く掘削を行わない護岸工法を採用した。

即ち施工区域にトリカルネットを敷き、更に基礎部分には割栗を敷いて搗き固め、次に基礎を据える。基礎石は滑出しに耐えるよう大きくし、見付五〇センチ角、奥行五〇センチとした。次に浸蝕部充填と裏込めとして、砂利を込め、表面には雑割石を並べて展圧し、更に基礎石補強のため、基礎石前面に張石を行った。

二号堀の場合は、旧石積は積方に二形式あって、いずれも時期不明確なため、これをその儘保存する事にした。幸い旧石積基礎の前面に、粘土の根巻があったので、これを利用して、梯子胴本を据え、これを基礎に空積の石垣を積み旧石積護岸の崩落をおさえた。

これまでも、清寧天皇陵、宣化天皇陵などの墳丘の崩壊防止工事を行ってきた。いずれも事前に発掘調査をして、遺構の存在状況や地盤の状態を考究し、ロックフィールド工法に習った捨石工法や、空石積石垣工法など、それぞれの遺構の状態に応じて、その保存に適した工法を採

用した。今後も、更に検討して、よりよい方法で施工してゆきたい。

(石田茂輔)

六 仁徳天皇陵野犬防止柵設置箇所調査

仁徳天皇陵の第一堤(第一濠と第二濠の間)と第二堤(第二濠と第三濠の間)に野犬が住みつき、その繁殖地となるおそれがあるので、その侵入を防止するために金網フェンスを設置することとなり、工事期間中の昭和四八年八月一日より三日間立会調査を実施した。フェンスを設置する位置は、第一堤(幅三四メートル)に於ては御拝所の、第二堤(幅一八メートル)に於ては、参道の両脇で、土堤を横断するように設置された。

フェンスは約一・八メートルごとに、一辺四〇センチ前後のほぼ方形の穴を約四〇センチの深さに掘削し、その柱を埋設するものである。御拝所西側フェンスの柱穴の一つから、数片のほぼ直立した円筒埴輪片が円弧をえがいた状態で検出された(第13図写真)。検出の位置は、御拝所西側約二〇メートルの第二濠に面するところで、土堤の肩より約一メートル内側に入った地表下約三〇センチの地点である。埴輪の外径は約三八センチ前後と見られる。

埴輪の据えられた土質は、不純物をまじえない黄褐色の粘性砂層で、この上には二〇〜三〇センチのブロック状の粘性土が覆い、表土は五セ

ンチ前後である。御拝所西側の各柱穴は、土層をこれと同じくし、黄褐色粘性砂層はほとんど水平に走っていて、当陵築造時の外堤の封土と見られる。なお、前記の円弧をなして直立する円筒埴輪片と同じレベルに、堀に平行するように隣接して、円筒埴輪片のかたまってもれていくのが認められるので、第一堤の第二濠側の肩部には円筒埴輪列の存在が推測される。検出した埴輪片は、ポリエステルフィルムで覆って埋め戻し、フェンスの柱はこの部分を避けて埋設することとした。

御拝所の東側の土層は、西側のそれとほぼ等しいが、黄褐色の粘性砂層の存在は西側ほど明瞭ではない。第二堤については、参道の東側は昭和四七年七月見張所改築の際の事前調査で、厚い盛土であることが判明したが、西側に於ても柱穴の掘削面には、ブロック状の粘性土しか認められなかった。

(戸原純一)

七 景行天皇陵渡土手樋管改修工事の調査

当陵は奈良盆地の東縁の傾斜地に位置しているので、その周濠は、水位の異なる一〇箇の堀に分れている。そのうち最も水位の高い、後円部のまうしろにある五号堀は、当陵に隣接する渋谷部落にとって、今なお重要な用水源となっている。それが北の下手に接する四号堀との間にある渡土手の樋管から漏水するので、その改修工事が昭和四九年一月から二月にわたって実施された。よって樋管を掘り上げる一月二二日から三日

間にわたって立会調査を行った。工事は渡土手を掘り割って旧樋管を撤去し、新たに樋管を埋設するもので、堀割の延長は約一七メートル、渡土手の天端からの深さは三メートル以上に達し、堀割の堀削幅は基底部で六〇センチであった。(「景行天皇山辺道上陵の出土品」所収第一図参照)はじめに地質の状況について述べると、堀割の堀削によって渡土手の断面があらわとなったのであるが、今回の堀割は、旧樋管埋設時の堀削幅よりも狭いために、堀削面にはほとんど旧樋管埋設の際の埋め戻し土である黄褐色或は暗灰色の粘性土しか認められなかった。しかし樋管の埋設位置が、旧樋管のそれよりやや深い部分では、堀割の壁面の最下部及び堀削底面で地山が検出された。地山は、青色、青灰色、暗緑色など多様な色調を呈し、土質は概して粘性である。梅田教授の御教示によれば、花崗岩、片麻岩、閃緑岩などの岩屑が堆積して出来た洪積期末頃の地層であろうとのことであった。

つぎに、この堀割を埋め戻した後も、この部分から漏水しないように、堀割に直交して五号堀寄りに遮水壁を設置した。そのため堀割の幅より左右に各約四〇センチ掘り上げたが、この部分は旧樋管埋設の際にも掘削されなかったところなので、渡土手本来の断面が顕われた。断面の幅は約四五センチであるが、その断面中に五号堀側の渡土手法面に平行するように約三〇度の勾配で葺石が走っているのが検出された(第11・12図写真)。現在の渡土手の天端より約二メートル、五号堀の底より約三〇センチ低いが、この葺石は三〇度の勾配で更に上下に延びている



第14図 後白河天皇陵域内遺構出土状況



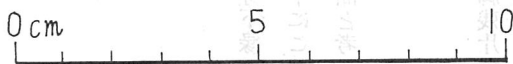
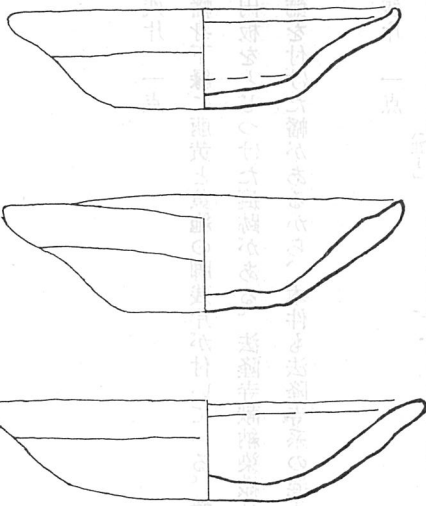
第13図 仁徳天皇陵第1 堤埴輪出土状況



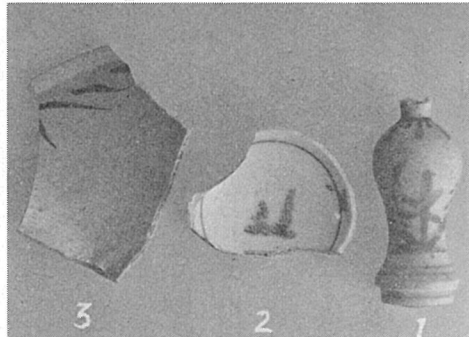
第16図 右高坏銘



第15図 後白河天皇陵域内出土高坏・台座



第18図 大原陵域内出土土器実測図



第17図 後白河天皇陵域内出土陶器



第19図 近衛天皇陵域内出土土器実測図